

いました。

アリスは唇がほころびて笑い出しそうになるのを押さえることができず、「あのね、あたしも一角獣なんて、おとぎ話のなかの怪物かとばかり思っていたのよ。生きてるのなんて、見たのは初めてよ」

「そうか、それならこうしてお互いに顔を合わせたんだから」と一角獣がいました、「お前がおれの存在を信じるなら、おれもお前の存在を信じてもいいよ。これで手を打とうじゃないか」

「いいわ、それでよければ」とアリスはいました。

p. 124-125

- 2069 竹河聖『狼男は笑わない 美苑学院ホラークラブ2』（角川書店, 1987年, 角川文庫）

ドンナは、亜美の存在そのものが“チェシャー猫”だと思いながら言った。不思議の国のアリスに出てくる“ニヤニヤ笑い”だけを残して消える猫である。

p. 159

- 2070 多田智満子『鏡のテオリア』（筑摩書房, 1993年, ちくま学芸文庫）

鏡の迷宮といえば、誰もがルイス・キャロルの童話を思い出すだろう。近年、この国ではおかしいくらいアリスばかりで、そういった珍現象がこの国を一種の「不思議の国」に仕立てているのではないかと思われるほどで、だから今更ここでとりあげるのも憚られるのだが、しかし「鏡の国のアリス」という秀作は、これ以上鏡的でありえないほどの、精密な鏡性の極致を示しているので、これを全く黙殺するわけにはいかないのだ。

p. 68-69

- 2071 『道具としての英語 基礎の基礎』（JICC出版局, 1985年, 別冊宝島49）

こうした一種の言葉の遊びを利用した話しの運びは、英語の文学の得意とするところで、ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」などではよく使われている。

p. 50

- 2072 東野芳明『マルセル・デュシャン』（美術出版社, 1977年）

アリスはドアを開けると、ねずみの穴ぐらいな、

小さな通路に通じているのがわかりました。

膝をついて通路を通してみると、

いままで見たこともないほどきれいな庭が見えるではありませんか。

どんなに、この暗い空間を抜け出て、

あそこの明るい花園や涼しそうな泉を歩きまわってみたかったことか。

しかし、そのドアには、首さえも入らなかったのです。

「たとえ首が入ったとしても、肩なしでは形なしだわ……」

——ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』より

p. 10